

Case Study @ nakasatsunai.

地域事例

中札内

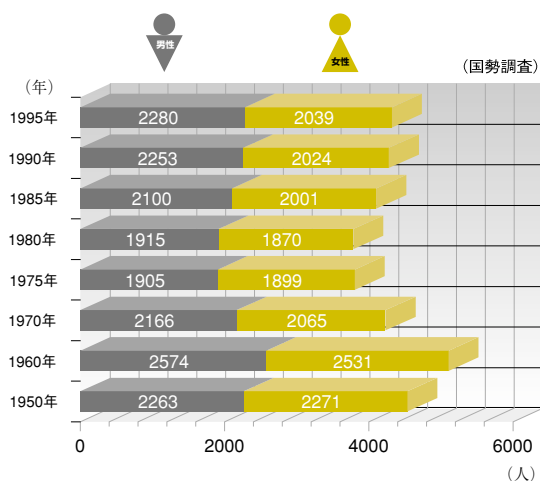
Nakasatsunai -
mura

村の足跡



はじめに

全国でもトップレベルの清流・札内川が流れる中札内村は、農業法人化、有機農業宣言、地域複合循環システムの構築、支援システムの確立など、基幹産業である農業を中心とした先進的な取り組みが行われてきたまちです。また、花いっぱい運動や景観の見直しなど、住民が自主的に取り組んできたまちづくり活動も見られます。中札内村に流れる自主自立の精神、この源泉を探るため、中札内村を訪ねました。



中札内村の人口推移 道内212市町村のうち、非過疎指定は全部で57市町村。中札内村の人口は、4,000人前後で推移しており、道内では唯一の非過疎村である。

分村、町村合併で、自立の基礎を築く

帯広市から国道236号を南へ車で約40分。国道沿いには、緑と黄金色の田園風景が広がります。

中札内村は、1947年に更別村とともに、大正村から分村して誕生した村です。当時、二分村は実例がありました。三分村したのは道内でここが初めての例でした。ところが、わずか7年後に町村合併の指示を受けます。このとき、中札内村では、広く住民の意見を聴取し、互いに研究する場を設けるため『町村合併研究会』が発足しています。研究会では、教育、医療、道路の改良整備など、着々と進む社会資本・生活環境の整備や人口の伸びを理由に、「まだその時期に至らざるもの」と結論を出します。町村合併は北海道の指導でしたから、合併しない村は「補助・起債はあとまわし」ということもあり、慎重な議論が繰り返されたと推測されます。結局、川西村、大正村が帯広市に合併することになりましたが、中札内村は、その波にのまれることなく、自立の道を選びます。

現在、中札内村は、道内で唯一の非過疎村。多くの市町村が受けている過疎指定の財政上の特別措置も適用されません。特別な措置を「あって、当然」と思うのか、「ないのが、普通」と思うのか。中札内の歴史には、そんなことを考えさせられています。

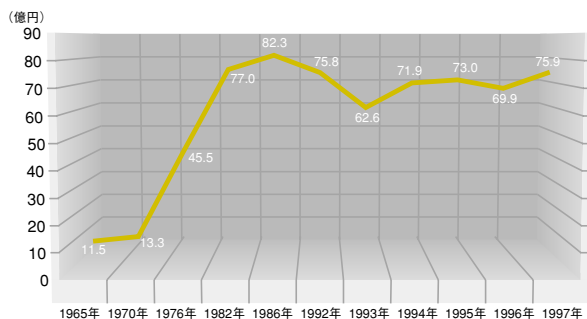
初の農業法人化から地域複合循環システムへ

中札内村の開拓は1905年に始まり、輸出作物であった豆の生産に取り組んでいます。しかし3、4年に一度は必ず冷害にあい、寒さと貧乏との闘いが長い間続きます。

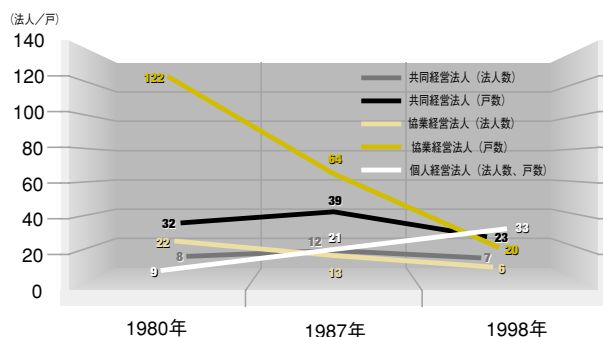
この実態をなんとか変えていかなければならないと“自主自立”を合言葉に村ぐるみで取り組んだのが、道内初の農業法人化・共同化です。5～10戸の農家を小組合にして、それを法人化し、農場を共同で経営する。'60年に3つの農業法人が登記を行ったことを契機に、翌年には10社、翌々年には16社の農業法人が設立され、農家を一つの経営体として成り立たせる基盤が築かれました。農業法人化が進んだ背景には、当時、農協組合長であった梶浦福督氏の強力なリーダーシップがあったといえます。

さらに'70年代に入り、“地域複合システム循環農業”の展開をはじめます。乳牛、養鶏、てん菜、馬鈴薯、小麦、豆類を重点作物にして、農家個々の専門化を図りながら、畑作と畜産の連係（有機物の還元）を進めるものです。このシステムを効率的に運用し、農業経営を支援する農作業受託組織・農業機械センターや、共同利用施設も設置されます。農業機械センターは、機械コスト削減を目的にしたものですが、特に酪農・畜産農家では粗飼料生産やふん尿処理を委託することで家畜の飼養管理に専念できるなど、専門化による個々の効果も見られるようになりました。このほか、飼料組合や酪農ヘルパー利用組合など、地域循環をうながす各施設が整備されています。

自主自立の精神を次代へ



中札内村の農業生産高推移 1980年代になって、生産高が飛躍的に伸びている。村内に3つある機械センターの設立は71年、72年、82年。また82年には中札内農協が肥料配合工場を建設し、85年には「有機農業の村」を宣言するなど、この時期は大きな転換期となった。



中札内村の農業法人数の変化 近年は共同経営法人数、協業経営法人数が減り、個人経営法人が増えている。中札内村では、現在、法人化に伴うさまざまな課題にも直面している。

今でこそ有機農業への関心は非常に高くなったといえますが、中札内村の取り組みは20年も前。“有機農業の村”宣言は、先進的な取り組みとして高く評価されています。この背景には、'59年に農協、行政、大学（北海道大学）が提携して設立した北海道畑作経営技術研究所の存在があります。また1984年には帯広畜産大学の協力で中札内村畜産研究所も設立され、早くから産官学連携の基盤ができていました。“学”の重要性を説いていたのは前出の梶浦氏であり、'55年に開設された中札内村高等学校（当時定時制、現中札内高校）も「農業者にも教育が必要だ」と、農業生を受け入れるために設置したものでありました。

昭和30年代から50年代にかけてのこうした取り組みは、梶浦氏に加えて、当時の太田一良村長、山本幸一農業委員会会長らのリーダーシップがあったといわれています。この時代には、農道を含めた道路の舗装が積極的に進められたほか、札内川ダムの計画調査、水道工事、道立中札内高等養護学校開設、中札内村と静内町を結ぶ日高・十勝中央横断道路の開発道路認定など、各種の社会資本整備が進展し、現在名誉村民である、この3名の連携が有機的に働いた成果ともいえるでしょう。

農業から文化へ

こうした動きのなか、住民が自主的に取り組む活動も見られてきました。

'75年から始まった花いっぱい運動は、ある農家が自宅前に花壇を作り始めたことがきっかけで、農家の主婦たちに花づくりが広がったものです。農業普及所職員のサポートもあり、家の前や公共施設の

前に美しい花壇が登場し、'83年には花づくりの愛好家団体が内閣総理大臣賞を受賞するなど、内外の注目を集めました。今年初めてのガーデニングコンテストが開催され、街頭の花壇は、一層華やかです。

'92年には、住民が中心となって進めたイメージアップ推進委員会が「まち並みや景観は財産である」とまちの再評価を行います。行政の支援もあり、同会では農村や市街地など、それぞれに具体的な景観イメージを示したガイドプラン（例えば、窓枠や街路灯に使うふさわしい色、望ましい植栽についてなど）を作成し、このガイドを全戸配布します。住民一人ひとりが、まちの景観を再認識し、自宅周りの清掃や雑草取りなど、行動の動機付けにも役立ちました。今年、ガーデニングコンテスト開催に合わせて、ガイドプランでも具体的な手法として取り上げ

られている廃車の除去を、行政が積極的に取り組んでおり、継続的な意識高揚をうながしています。

推進委員会が発足した'92年4月、中札内村では、“芸術”との新しい出会いもありました。六花亭製菓(株)が運営する坂本直行記念館のオープンです。坂本画伯が、同社で発行している児童詩誌『サイロ』の表紙絵、包装紙のデザインを手がけていることは、ご存知の方も多いでしょう。昨年からは、同じ敷地内にある北の十名山を展示している相原求一朗美術館、関口哲也写真ギャラリー・北の大地館、地元中札内の農産物を使ったメニューが並ぶレストランポロシリなどを総称して、『中札内美術村』と名称を改めています。坂本直行記念館の開館は、住民が文化に触れる機会を創出し、昨年2回目を迎えた北の大地ビエンナーレ展に取り組むきっかけにもなりました。



坂本直行 記念館の建物は、1924年に帯広市内に建てられた旧三井金物店の石蔵を移築したものだ。

「文化活動は地域への還元」という六花亭の本社は帯広市。同じ十勝ではありますが、あえて中札内村を舞台にした理由は何なのでしょう。「以前から食材等の取り引きがあったことありますが、一番こだわったのは、中札内というよりも、この場所でした」(六花亭製菓・松橋氏)。開拓は柏林との闘いであったという坂本画伯の言葉から、平地で、自然の柏林のなかに記念館を建てようと、当時副社長であった小田豊氏が見つけたのが、ここだったと言います。もちろん人的ネットワークや行政のバックアップも背景にはあるようですが、条件にこれほど合う地はほかになかったということです。単なる柏林は、いまでは年間10万人以上が訪れる、十勝観光の一大名所に成長しています。

また中札内村では、昨年からは郊外の飲食店が相次いでオープンしています。景観を楽しめるスペースに店を構え、店主は村外から移住してくることが少なくありません。美術村も同様ですが、外の人間が、村の景観を高く評価し、その資源を有効活用しようと考えているのです。タレントの田中義剛さんが始めた花畑牧場の系列であるレストラン花畑(中札内農村休暇村内)もその一つ。田中さんはガーデニングコンテストの提案者でもあり、客観的な視点でまちづくりへの助言役も果たしているようです。

住民が再認識した財産が、外部からも認知され、互いに融合し、新しい文化が作り出される。これは、まだ点の動きですが、次代の中札内村をつくる手法の一つになるのかもしれない。



レストラン 花畑前にも、ガーデニングコンテスト参加作品が。コンテストには個人、団体合わせて9組が参加した。

自立への課題

新しい挑戦には、多くの課題を伴います。中札内村でも、特に農業の分野では、法人に加入する農家は減少傾向にあり、個別経営法人が増加。農地の名義変更をめぐる制度上の問題が発生するなど、農業法人化のあり方も新しい展開を検討する段階にあります。また、2つの研究所を再編するなど、過去の取り組みを見直す動きも出ています。

「有機農業の村であることを宣言したことをはじめ、方向性は間違っていない。中札内村は常に新しいことに挑戦してきたように思います。与えられた環境のなかで、オリジナルのアイデアを出し、取り組んできた。先例がないからしんどいのは確かです。今もまだ模索の毎日ですが、どれだけ挑戦できるのか、そんな気持ちもあります」(中札内村役場政策調整課)。

生産にとどまることなく、販売まで一貫して管理したいと、昨年、東戸蔦生産組合が発売した『とがち中札内牛乳』は、その代表的な例かもしれません。搾りたての味と栄養を生かすため、72℃で15秒間殺

菌するパス殺菌を採用。原料乳で味が左右されますから、牛をいかによい状態にするかが勝負です。遺伝子組み換え飼料を一切使用しないなど、生産段階での徹底したこだわりが、「生産者の顔が見える商品づくり」への自信をうかがわせます。村独自のシステムである機械センターの利用でコスト削減も図られており、首都圏の自然派志向の主婦からも注目を浴びています。

質のよい商品を流通のなかで、どう消費者に訴えていくのか。販売面では苦戦しながらも、その挑戦は続きます。



とがち中札内牛乳は、札幌市内では、スーパージョイ、スーパーまつだなどで販売中。

牧場から翌朝には食卓へ届けるデイ・ワンシステムで品質を保つ東戸蔦生産組合の工場。



取材を終えて

多くの市町村で離農が叫ばれるなか、中札内村では、一貫して農業へのこだわりを大切にしています。法人化の導入、機械センターの設立、支援システムの確立、研究施設の立ち上げなど、農業の機能を再編したほか、近年では、意欲的な後継者を受け入れようと、新規就農者誘致に関する特別措置条例も設けられています。また農村景観という新しいまちの財産を発見し、外部からの評価も具体的な形で現れ、新しい文化が築かれつつあります。

中札内村のまちづくりは、常に農業中心のまちづくりでした。リーダーに恵まれ、方向性がゆるがず、継続的な取り組みがなされ、その歴史が今の中札内の基盤になっているのでしょう。農業基本法が改正となり、今後はますます市場原理が導入され、農業は激しい闘いが予想されています。

「時代は変わっています。いま私たちがやっていることは、大変なことなのでしょう。でも、それはわかっていて、取り組んだのです」。次代への生き残りをかけて取り組む東戸蔦生産組合の西本社長の言葉に、忘れかけている何かを見た気がします。



中札内美術村 内にある花六花。うどんとソフトクリームなどが味わえる。



中札内村 の観光名所の一つ、
ビョウタンの滝。